Agriculture & Co-operatives. Dey, K. L & R. Bahaduri 1896 (reprint 1984). The Indigenous Drugs of India. pp 23-29. Thacker, Spink and Co. Watt, G. 1908 (reprint 1966). Commercial products of India. p. 1106. Tomorrow's Printers & Publishers. Chadha, Y. R. et al. (ed.) 1976. The wealth of India, raw materials Vol. X (Sp-W). pp. 451-457. The Pubilications & Information Directorate. Berger, F. 1960. Handbuch der Drogenkunde V. 521-522. Wilhelm Mandrich Verlage.

□林 讃標：**台湾蘭科植物** (3) (Lin Tsan-Piao: Native orchids of Taiwan (3)) 300 pp. 1987. 台北南天書局，台北. 平装本500元，精装本 1,200元. 林讃標教授は林学・林業化学の専門家で，昨秋ＵＳＡの留学から帰国したばかりの人。ラン科を愛しこれを研究するのは副業（?）かも知れないが，その写生図の精妙さは植物種の姿態を描き尽して余ます所がなく，既に定評がある。本書はこの種の出版の３冊目で，「序言及誌謝」によると，本書は91種の台湾野生ランを記述し，10数個の新種を発表，既に出版した２冊をふくめて271種の研究が終った。宝島（台湾島）は320種のラン科があると云われるが，既にその80%を完了したことになる。第３巻の収録分は発見が困難であるものが多い。台湾のラン科は研究される前に人類によって亡ぼされることを恐れている。原稿は1981年以前に完了していたが余暇がなくて出版がおくれ，1985年の夏秋の候に製版作業に入り，ついに出版に到った。第１冊は出版以来12年を経過した（１冊 1948, ２冊 1950)。巻首（pp. 8-10）の彩色図片索引はカラー写真170個の頁を示し，各種には凸版図がついている。書中ＡＢＣ順に次の諸属をあつかっている。（ ）中は書評者の注。→印はその次の属から最近分割されたか，またはそうではなくてもその属に至近のものであることを示す。*Acanthophippium, Agrostophyllum, Amitosgtima, Flickingeria* (Hawkes 1961 =*Ephemerantha* Hunt et Summerh.), *Epigeneium* (→*Dendrobium*), *Eulophia, Galeola, Gastrochilus, Gastrodia, Herminium, Hippeophyllum* (→*Oberonia*), *Lecanorchis, Listera, Microtatorchis* (→*Taeniophyllum*), *Myrmechis, Nervilia, Oberonia, Odontochilus, Oreorchis, Pachystoma, Phreatea, Platanthera, Pogonia, Ponerorchis, Taeniophyllum, Tainia, Thelasis, Thrixspermum, Vrydagzynea, Zeuxine* 以上35属。写真の出来上りは日本書のものよりやや劣るかに見えるが，よい方である。著者は各種について詳細な全形図および部分図を凸版として描いている。*Gastrodia*（新種 2 spp. を発表），*Lecanorchis* など saprophyte は稀にしか採集されず，またそれがよい状態で描かれる機会も少ない。これらに関してはまだ将来の研究が待たれる。著者の異名の引用は簡略である。したがってその

種属に対して大きい貢献をした文献でも新名がない限り必ずしも引用されていない。これは著者の前述の 1-2 冊に共通の基本態度のようである。したがって日本の著者前川，井上，津山などの文献にふれることは少ない。林博士は Harvard 大の Orchid Herbarium には滞在し，その方からの直接の知識も取り入れている。*Habenaria-Plathanthera* complex の所謂 sinker の研究は日本での形態的な基礎研究があるが，これは間に合わなかった。*Gastrodia gracilis* Bl. に関しては台湾産の *G. dioscoreirhiza* Hayata を正名とするが，これは Blume が日本産で記述したものの方が正しい。評者のこの件に関する図は，断ってあるようにアルコール漬の標本によったもので，まぬがれえない多少の変形，溶解がある。このことはすべてのラン科の研究で念頭に置くべきことである。ラン科は大陸部中国，インドシナ，ヒマラヤ方面との更に一層の比較研究が望まれる。ラン科の種の相当部分は広い分布を持ち，全世界一種という説のある種さえある。このためには地域を越えた研究が必要である。またラン科の花，または地下部の諸器官の変異性と複雑性は常に念頭に置かれるべきものである。近年デパートなどの売場で湾台のラン科の鉢植が高値で売られているのを見るにつけても，濫獲の害を思って寒気をよもおす。　（津山　尚）

□三橋　博（監修），岡田　稔・布目慎勇・寺林　進・三木栄二（編集），藤多哲朗・山内辰郎・糸川秀治（編集協力）：**原色牧野和漢薬草大図鑑**　782 pp. 1988. 北隆館，東京. ¥35,000. これまでに薬用植物の原色図鑑といえば世界的には，Köhler の Medizinal-Pflanzen Bd. I-III (Berlin, 1898) が有名であり最も権威のあるものとされている。しかしこれは今や古典に属し手軽には手に入らない。今回刊行されたこの図鑑は薬用植物について一般から求められる知識を満たすものとして，又専門の学生や研究者の参考書としても推奨される。その内容は和漢薬草薬木の他に外国産薬用植物を加えて約 1,400 種を収載して居り，その配列は巻頭に表示してあるように牧野新日本植物図鑑と同じく自然分類表に従っているが，科の中の属はアルファベット順になっている。図版はすべて原色で相当よく各々の特徴を示し，特に薬用部分を拡大明示していることは本図鑑の意図を示している。記載は分布，形態，薬用部分，成分，薬効，薬理，使用法などとなっているが，薬用関係の記述にスペースを割くため，形態の記載は比較的簡略化され，日本産のものについては牧野植物図鑑の対応する部分の頁数を記してそれを参照するようにしてある。外国産の薬用植物の名称についてはラテン名をカナ書きにしてあるものもあるが，ダイオウ類の項目などで目立つように和名に混じって新しい日本語名称が散見する。これらは広く認められているものであろうか，少し気になる。しかし全般的には図版は精確であり，彩色も美しく自然のものに近い。薬用植物は現在広く注目されているから，一つの典拠を提供するものとして評価されるであろう。　（柴田承二）